

## 基礎演習 B

大阪樟蔭女子大学 田原広史

### 1. はじめに

国文学科の基礎演習は平成 11 年度から 1 回生の専門科目として開始され、12 年度で 2 年目になる。現在のところ、1 回生段階での不登校・ドロップアウトを予防し、2 回生以降の専門教育への橋渡しをするという点で効果が現れている。高校教育との接続（アーティキュレーション）という観点からも、その役割を十分に果たすものであると言えるだろう。

国文学科の基礎演習は、半期で A と B に分かれている。A が文学分野、B が語学分野からなっており、前後期で A B の両方を受講する。基礎演習 B は、平成 11,12 年度は 8 クラス編成、4 人の教員で担当しているが、13 年度以降は定員減にともない、6 クラス編成になることが決まっている。また、現在は専門科目に位置づけられているが、13 年度のカリキュラム改正にともない、共通科目の枠組みの中へ移される。

ここでは、平成 12 年度前期に田原がおこなった内容を中心に紹介する。

### 2. 講義要項(シラバス)

講義要項の内容を以下に示す。概要部分は「基礎演習 A」と共通である。

授 業 名	基礎演習 B	学 年	1 回 生	単 位	B1	選 必		必 修	
担 当 者	田原広史・後藤英次・八尾由希子・生井真理子								
概 要	大学生としての基本的な学習・生活態度を学ぶとともに、国文学科学生としての主体的学習意欲の確立を目標として、「読む - 考える - 書く」・「聞く - 考える - 話す」という二つの基本的姿勢を確認しつつ、少人数で基礎的演習を実施する。そのために、「日本語」を表現手段とする広範囲の知的教材を、学生と教員との双方向性を持った段階的演習の中で学んでいく。								
テ ー マ	1.話しことばと書きことばの違い 2.口頭表現について 自己紹介、スピーチ 電話のマナー 口頭表現のまとめ 3.文章表現について 表現技術 文章の構成、要素				語法 原稿用紙、手紙の書き方 文章表現のまとめ 4.ディスカッションの方法 材料の検討 ディスカッションをおこなう 5.まとめ				
評価方法 テキスト	平常点、レポート 『すぐに役立つ国語表現』国語表現法研究会編、学術図書出版社、1,650 円								

## 2. 教科書について

教科書の目次の概要を以下に示す。

### 第1章 文章表現

- 1.用字(ローマ字、仮名、漢字)
- 2.用語(反対語・熟語・ことわざ・慣用句など)
- 3.表現技術(文章の構成・文章の要素・語法・原稿用紙の使い方・手紙の書き方)

### 第2章 口頭表現

- 1.話しことば(話しことばの特徴・話し方の基礎・話の形式)
- 2.スピーチ(自己紹介・披露宴でのスピーチ・口頭発表)
- 3.電話(かけるマナー・受けるマナー)

この教科書は、大きく「文章表現」と「口頭表現」からなっているが、半期で全体をおこなうのは無理があるので、「文章表現」については、3の表現技術についてのみ扱うことにしている。「口頭表現」については量的に少ないので一通り触れることができる。

この教科書では単元ごとに練習問題がついているので、教師が問題を適宜選び、自宅学習させている。今回は、表現技術の問題(77～100頁)及び、話しことばの問題(109～120頁)を課題としておこなった。これらについては、いったん宿題としておこなわせた後に、授業内で答え合わせ及び解説を加えるという形で進めた。特に文章を要約する上で必要となる、文章の構成、文章の要素についてはかなりの時間を割いた。

以下では、授業で扱った順序にしたがい、内容を紹介する。

## 3. 授業内容

### 3-1. 導入 [第1・2回](4/12,19)

第1回目は、まず、教科書を持っているかどうかを確認し、持っていない者にはただちに買ってくるように命じることからスタートした。全員が揃うのを待っている間に、顔と名前を覚えるための写真付名簿用の写真を撮影し、写真を撮り終わった後に、授業に入る。

まず、この授業の趣旨、目的を述べた。この授業では、次のようなことについて学んでいくこと。まず、大学四年間の過ごし方、大学で何を学ぶかということについて考える場とすること。また、大学における教師と学生との関係をこの授業で確立すること。さらに、大学で勉強するにあたっての考え方や、基本となる技術について身につけるきっかけとして欲しいこと。というようなことを述べた。

次に、授業開始にあたり、自己紹介をおこなうのが流れとして自然なので、教科書の第2章 口頭表現の2.スピーチの部分から始めた。ただし、第一回目は、教科書でスピーチについての注意事項を確認するにとどめ、一人2～3分をめぐりに、自宅で読み上げ原稿を原稿用紙にまとめてくる課題を与えた。量の目安が分からない時は、実際に声に出して練習してみるように助言した。

第2回目の授業では、その原稿に基づき、一人ずつ口頭で自己紹介をおこなった。他の者はできるだけ詳しくメモを取りながら聞くという形をとった。これは授業におけるノートの取り方を指導する第一歩と位置づけている。一人が終わった時点で、書き漏らした点、聞き逃した点についての質問をさせる。また、教師は自己紹介の仕方、声の大きさ、話す速さ、話の組み立て方等について、気付いたことを適宜述べる。10人程度とはいえ、授業一回分はゆうにかかる。

第2回目の課題は、今日おこなった自己紹介および他人の自己紹介のメモをワープロで清書することである。国文学科の学生にとって、ワープロを使いこなすことは就職時に必須の技術であることを説明し、納得させる。ワープロを持っていない学生については、空き時間に日本語研究センターにあるパソコンを使うように指示する。

### 3-2.口頭表現 【第3・4・5・6回】(5/10,17,24,31)

第3回目から第6回目までは、教科書に沿って「口頭表現」の授業をおこなった。教科書の問題についても適宜、宿題として課した。その際、授業で説明し終わった部分の問題を課すのではなく、逆に授業で扱う前の部分の問題をさせることにした。もし、問題の内容が理解できない時は、教科書の該当箇所を各自確認してから解くように伝えた。また、それでも分からない場合は放課後に聞きに来るように指示した(それに対して「私はそんなに暇ではありません」という勘違いした発言をする学生がいて驚いたが、それはこちらが言いたいセリフであると諭した)。これは、予習あるいは自主学習の指導と考えている。

第3回目の冒頭では、先週出したワープロ清書の課題に関連して、キーボードの指使い、ホームポジション、レイアウトの設定について確認をおこなった。基本ができていないと、技術が上達しないことを述べた。次に教科書の「話しことばの特徴」に関連して、「話しことば」と「書きことば」の違いを言語学的観点から説明した。第3・4回目は講義中心の授業形態を念頭に置き、要領よくノートを取る方法についても指導した。

第5・6回目は宿題の問題の答え合わせと解説にあてた。話しことばの問題は、緊急放送の原稿の推敲、言い訳の多い文章をすっきりした文章に直すもの、省略語の例を考えるものなどがあつた。また、あわせて次に扱うテーマである「コミュニケーション手段」の導入として、自分と電話との関わりについて発言させ、それをホワイトボードに書き出すという作業もおこなった。第6回目には、全体のほぼ半ばにあたるので、第1～6回の授業内容のまとめをワープロで作成する課題を与えた。

### 3-3.ディスカッション 【第7・8・9回】(6/7,14,21)

第7回目の冒頭には、6回目までのまとめを回収した上で、ノートを作成する意義と、作成にあたってのポイントについて解説した。

この三回については、教科書から離れ、自分がどのように人とのコミュニケーションをおこなっているかについて意見を出し合った。この結果を最終的にレポートにまとめることを事前に伝えた。まず、枠組みとして、「話しことば」による手段と「書きことば」による手段とに大きく分け、第3回の授業で解説したそれぞれの特徴について再確認した。

次に、前者に属する会話、電話、後者に属する手紙、ハガキ、ファックス、電子メール、ポケベルについて、それぞれの学生がどのように関わっているか、また、それぞれの手段の良い点と悪い点を口頭で挙げさせた。第 8 回目終了後、7,8 回の授業であがった内容を箇条書きの形でまとめる宿題を課した。

第 9 回目については、コミュニケーション手段については、従来の電話と携帯電話の使用目的、機能の違いに絞って考えた。その他に、6/7 に提出したノートの添削結果を返却し、個別にコメントを加えた。また、ワープロに関連してパソコンの基本事項に関する質問がいくつかあったので、ビット、バイトといった情報量の単位、フロッピーディスク、CD-ROM、CD-R、DVD といった記録媒体の種類と特徴、Windows を中心としたオペレーションシステムについて解説した。

### 3-4.文章表現 【第10・11・13回】(6/28,7/5,19)

まず、第 10 回目の冒頭では、期末レポートの内容と締切(7/24)について通知した。早めに通知した理由は、時間をかけて取り組んで欲しいからであると伝えた。期末レポートの内容は以下の 4 つである。

- 1.授業でやったことの一覧(日付順に箇条書きで)
- 2.教科書の内容のまとめ(授業で扱った部分)
- 3.練習問題の解答(要約等の記述問題の部分)
- 4.「コミュニケーション手段」のレポート

4.については、さらに題および目次を以下のように指定した。目次を指定した理由は、おそらく生まれて初めて書くレポートであることから、最初にレポート、論文の一般的な形式を示しておくのがよいと考えたからである。

#### 題「コミュニケーション手段について」

- 1.はじめに
- 2.コミュニケーション手段の種類(「話しことば」と「書きことば」に分けて)
- 3.それぞれの特徴(「良い点」と「悪い点」について触れること)
- 4.私との関わり
- 5.まとめ

第 10・11・13 回の三回については、教科書の文章表現について扱った。教科書本文を適宜参照しながら、練習問題の見直しを中心に授業を進めた。この部分の内容は、道案内の問題、順番をバラバラにした文章を起承転結を意識しながら元に戻す問題、要約の問題、主語述語の関係を意識して書き直す問題、曖昧文を明確にする問題、冗長な文章を簡潔にする問題などがあった。

第 13 回目は、最後に、これまでやったことの確認と、それぞれの目的、レポート内容の確認をおこなった。また、最後の 10 分を使って授業アンケートを実施した。アンケー

ト内容および結果については、次節で触れる。

### 3-5.研究の紹介(番外)

【第12回】(7/12)

第 12 回目は、学生のリクエストに応える形で、報道取材を受けた折りの新聞記事および5分程度のテレビニュース番組のビデオ2本を視聴し、研究内容を紹介した。また、報道各社の紙面作り、番組作りにあたっての作り手の姿勢について、また、実際の記事、番組の問題点等について主にマイナス面を中心に解説した。この回は最後の方だったこともあってか、かなり印象に残ったらしく、以下の授業アンケートの「印象に残ったこと」に半数の者があげていた。

### 4. 授業アンケートについて

授業アンケートの結果(田原分)を簡単にまとめておく。

#### 【質問内容】(自由記入方式)

- 1.一番印象に残っていることは何ですか。
- 2.良かった点は何か。
- 3.もっとこうして欲しかったということがあれば書いてください。
- 4.教科書について感じたことを書いてください。
- 5.その他の意見があれば書いてください。

#### 【回答結果】( )は人数

- 1.テレビ番組(5)、自己紹介(2)、写真撮影(2)、ワープロ打ち(1)
- 2.少人数だったこと(4)、ワープロが学べたこと(3)、自己紹介を通じて仲良くなった(3)
- 3.宿題の量や期限を手加減して欲しい(3)、部屋が狭かった(1)、特になし・無記入(6)
- 4.問題が難しかった(6)、意味が分かりにくかった(2)、変な問題が多い(1)、特になし(1)
- 5.レポート課題が多い(1)、特になし・無記入(9)

まとまった意見としては、1.の印象に残ったことの「テレビ番組」、2.の良かった点としてあがっている「少人数であること」、4.の教科書に関する意見として「問題が難しかった」の三つがある。授業を終えるにあたって、「とても面白かったです」「こんな授業が受けたかったです」という感想が、学生の口から直接聞いたことは、この授業をやったかいかいがあったと感じた点である。

### 5.まとめ

以上、平成12年度前期の基礎演習Bについてまとめた。反省点、改良点について考えてみる。

まず、講義要項については、予定した内容と実際におこなったものとは、ほぼ一致して

いるが、導入部分（自己紹介）が明記されていないこと、予定した順序が実際におこなったものと食い違っていることがあげられる。来年度以降修正が必要である。ただし、複数の教員が同じ要項を使っているため、他の教員の授業内容も確認しておく必要がある。

教科書については、説明の仕方、練習問題の内容など、他の教員からも問題があることが指摘されている。授業アンケートでは、「問題が難しい」という意見が多かったが、これは設問意図がはっきりしないものが多かったため、このような印象を持ったと考えられる。ただし、自習用のテキストではないので、授業中に教師が補足説明をおこなうことは可能であり、ある程度の不備については、むしろ説明の際の材料として利用できる。この教科書の良い点は、目次を見れば分かるように、章立てが非常にすっきりしていることであり、その点は評価できる。また、練習問題の用紙が切り離せるようになっているので、提出させる際に便利である。

授業内容については、昨年度この授業を開始して以来、試行錯誤しながらおこなってきた成果があって、徐々に内容が固まりつつある段階であると考えている。昨年度の前後期と今年度前期で都合3回おこなったことになる。注意していることは、全体の統一テーマを持たせること、個々の時点でできるだけ多くのスキルを含めること、教師が一方的におこなうのではなく、できる限り学生との双方向性を保つこと、といったことである。

具体的に述べると、この授業の統一テーマとは、「コミュニケーション」である。導入部分の自己紹介はその第一歩と言える。口頭表現、文章表現の基本を学びながら、ディスカッションのテーマとして「コミュニケーション手段」を掲げている。ディスカッション自体もコミュニケーションの一形態であるし、ノートの提出と添削、レポートの提出についても「コミュニケーション」という観点から指導をおこなっている。スキルを含めるとは、ワープロの使い方、ノートの取り方、口頭での発表の仕方、レポートの書き方といった、大学で勉強する上で必要なスキルを体験し、それらの基本を習得することである。双方向性とは、可能な限り学生に発言を促すことであり、一回の授業で一人の学生につき、数回発言させるように努めている。

筆者自身、この基礎演習を導入して、学生を見る目が、それ以前の学年と大きく変わった点がある。それは、その後の授業において学生一人一人の顔がはっきり見えてくることである。実際は、8クラスのうちの前後期で四分の一、20～30人の学生としか接していないわけだが、それを足場としてさらに多くの学生を知ることができる。単に期末試験の答案の上だけで接するのと比べて、その本人の顔と名前が一致し、何度かことばを交わしたことがあるというだけで、これほどまでに教えようという意欲が変わるとは思っていなかった。それは学生の側にとっても同じようだ。教師が自分の顔と名前を知っているということは、それだけで学習意欲の向上につながると思われる。案外このあたりが、基礎演習（来年からは全学共通科目の基礎ゼミ）の一番の役割であり、効用であるのかも知れない。